

火を灯したろうそくを中に入れた灯籠を、夜、川に流す灯籠流し。お盆の時期に自宅にお迎えした故人やご先祖様をお送りする、送り火の行事として全国で行われています。

夜の闇にゆっくり、ゆらゆらとゆれて遠くへ流れて行き、時に沈んでしまったり、消えてしまう灯籠は、私たちに世の無常を感じさせます。また近しい方を亡くされて悲しみの癒えない方にとっては、故人との別離を感じさせ、改めて冥福を祈る機会となるでしょう。

ただ、近年では、河川の汚染の問題から、そのまま流すことをせずに、下流で回収したり、流さずに途中で止めておいたり、さまざまな工夫がなされています。

あるお寺でのお話です。そのお寺では毎年お寺の近くの狭い水路で灯籠流しがおこなわれ、その年は三百人を越す皆さんが並んで手を合わせて、灯籠を流しました。

その翌日の朝五時半。灯籠が流れて行かないように水路の下流に仕掛けておいた網を上げ、途中水没した灯籠を回収するために住職さんと数人のお手伝いの方が行ってみると、水路に降りて一人黙々と灯籠を回収している方がいます。よくお顔を見ると、二年前に三十代の息子さんを亡くされた方でした。ご葬儀の時のあまりの悲しみの様子は住職の脳裏を離れないといいます。「おはようございます。」と声をかけると、少し照れくさそうに返ってくれました。

よく見るとほとんど灯籠を引き上げていました。水路といっても生活排水も流れるあまりきれいとはいえない水の流れる川です。そこに住職さんたちよりもずっと早く来て回収をしていたのです。以前に、「流した灯籠はどうなるのですか」と質問されたことがあったそうですが、灯籠に亡くされた息子さんを重ね合わせて手を合わせて送り、その翌日に見送った灯籠を回収する…。この方は灯籠を流すだけでなく、その後始末までも、故人の供養として行っていたのです。

その三年後、その方は亡くなりました。息子さんを亡くされた頃から患っていたそうです。思えば、そのような体で灯籠の回収をなさっていたことになりました。

今年も全国で灯籠流しが行われます。それぞれの現場では、どうしようもない別離の気持ちと向き合いながら手を合わせる多くの方々がいて、それを支える人々もいるのです。夏の風物詩の裏側のお話でした。